

国立国語研究所学術情報リポジトリ

言語行動を説明する言語表現：専門的文章の場合

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): Linguistic behaviour, Metalingual expression, Types of behaviour, Professional essays 作成者: 杉戸, 清樹, 塚田, 実知代, SUGITO, Seiju, TSUKADA, Michiyo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001338

言語行動を説明する言語表現

—専門的文章の場合—

杉戸 清樹

塚田実知代

SUGITO Seiju, TSUKADA Michiyo : On Metalingual Expressions
Referring to the Type of Linguistic Behaviour

要旨：言語ないし言語行動について言及する言語表現としてのメタ言語表現は、その内容や形式において広範な広がりをもつ。この中で、表現主体がいま行おうとする（ないし、いま行ったばかりの）言語行動について、その言語行動としての種類や機能を明示的に表現するメタ表現も日常的にしばしば観察される。

当面の資料として専門雑誌所載の専門的な文章を対象にこの種のメタ表現の現われ方を記述・検討したところ、次の諸点でいくつかの特徴が指摘された。

- ①用いられる動詞（句）と、その修飾要素の種類
- ②言語行動のどの側面に言及するかという言及内容の種類
- ③文章中でメタ表現の出現する位置
- ④言及の姿勢（肯定的か、否定的かなど）
- ⑤そのメタ表現を行った理由の明示的な表示の有無

キーワード：言語行動 メタ言語表現 言語行動の種類 専門的文章

Abstract : In everyday Japanese, both spoken and written, we can observe a great many types of metalingual expressions which refer to language or linguistic behaviour. Among them, metalingual expressions which refer to the types and functions of linguistic behaviour form one of the most frequent groups of metalingual expressions.

In this article, we made a descriptive survey of these types of metalingual expressions collecting examples in special articles or professional essays. Several characteristics of the expressions could be pointed out on the following aspects :

- ① Variety of the types of verbs (or verb phrases) and their modifiers
- ② Variety of the elements of linguistic behaviour referred to
- ③ Position of the occurrence of these expressions in the texts
- ④ Modality of the subject (positive or negative)
- ⑤ Reason or motive for the metalingual expressions as seen in some explicit cases

Key words : Linguistic behaviour Metalingual expression Types of behaviour
Professional essays

1. はじめに

われわれの日常的な言語生活をふりかえってみると、その言語場面で話し手（書き手）自身がこれからどんな種類の言語行動をしようとしているか（あるいは、たったいま、どんな種類の言語行動をしたか）を、具体的な言語表現の形で明示的に言ったり書いたりすることがしばしばあるのに気づく。たとえば次の例の下線部分のような言語表現である。

「チョットお願い、ソコノ窓アケテチョウダイ。」

「ソレデハ私カラゴ説明イタシマス。コノ計画ノソモソモノ発端ハ……」

「先生、質問！ 資料のプリント 3 ページノ 5 行目デスガ……」

「念ノタメニ書き添エテオキタイ。右デ〇〇ト書イタノハ……」

「以下、イクツカ例ヲ挙ゲテオクコトスル。」

「以上ハ前置キトシテ申上ゲマシタ。ココカラ本題ニハイリマス。」

それぞれの例において下線の言語表現は、それに続く部分が、依頼、説明、質問、補足説明（書き添え）、挙例、前置き、本論叙述という種類の言語行動であることを明示的に（つまり、具体的な言語形式による言語表現によって）説明したものであると言える。言語行動について言及し、それ自体が言語表現をともなる言語行動であるから、いわゆるメタ言語表現とよばれる言語行動類型に属するものである。

こうした言語表現の類型は、それぞれの言語場面における言語行動のすがたを明示的に説明することによって、そこで行なわれるコミュニケーションにいくつかの働き（後述。杉戸1989）をすることが期待されるものだと考えられる。さらに、それらが言語行動について明示的なことばでいろいろに語るものであることから、言語行動とかコミュニケーションについて考えようとするときの有力な手がかりになるものだとも言える。

小論では、このような種類の一群のメタ言語表現について、具体的な書きことば資料を事例的にとりあげて検討する。

【注】小論は、言語行動研究部第一研究室において継続している一連の研究の、中間的

な成果のひとつである。具体的には①昭和57～59年度文部省科学研究費特定研究『言語の標準化』（代表・柴田武，木下是雄）の渡辺友左班「日本人の言語行動の類型」において杉戸が分担した「言語行動の規範とその運用」、②昭和60年度科学研究費奨励研究A「言語行動の目的・機能および対人的な配慮を明示する言語表現」（代表・杉戸）、③昭和56年度以降継続する「現代敬語行動の研究」において、小論の対象とした表現類型を検討している。杉戸と塚田は一貫してこの研究を担当した。小論をまとめるに際しては、基本的な枠組みと観点を杉戸が提示し、これに基づく事例の収集と整理を塚田が担当した。その分担に応じて素稿を執筆し、協議を経て成稿を得た。

2. 言語行動についての言語表現のひろがり —— 対象とする表現類型の位置

われわれが日常的におこなうメタ言語表現としての言語行動が、ここで注目しようとしている言語行動の種類について説明・言及するものだけでないことはいうまでもない。これ以外にも、いろいろな種類のメタ言語表現をわれわれは日常的におこなっている。その種類がどのようなひろがりをもって、どのような観点から区分することができるかについては、これまで杉戸1983a、杉戸1989などにおいて私見を述べた。

小論が検討の対象とするところの、言語行動の種類について言及するメタ言語表現がそうしたひろがりのなかでどのような位置を占めるものであるかについて、すでに述べた私見を土台にしてあらかじめ概観するとすれば、つぎのような指摘ができるだろう。

2. 1. メタ言語表現の言及対象から見たひろがり

メタ言語表現がどのような範囲や種類のものごとに言及するのか、という観点からメタ言語表現のひろがりを考えることができる。杉戸1983aでは、D. ハイムズ1972などの枠組みを援用して、実際のひとつひとつの言語場面（での言語行動）を成り立たせているものごとをとりだし、メタ言語表現は言語行動の成立要素それぞれについて言及し得るものであることを指摘した。そこで挙げたのは次のような話しことばの事例であった。

- ① 言語行動の主体
ワタクシナドガシャシャリデテ不躰デスケレドモ……
- ② 言語行動の相手
ホカナラス君ニコソ言イタカッタンダケレドネ……
- ③ 言語行動の機能上の種類
コレハオ尋ネシテイルノデシテ，決シテ命令シテイルノデハアリマセ
ン
- ④ 言語行動のジャンル
コンナ簡単ナメデハ失礼デスノデ，アラタメテ正式ノ文書ニイタシ
マス。
- ⑤ 言語形式・言語表現
「アナタ」ト呼ブノハ気がヒケマスノデ，「先生」ト呼バセテイタダキ
マス。
- ⑥ 言語行動の素材・話題
コンナコト言ウベキカドウカワカリマセンケレド……
- ⑦ 言語表現の調子
ザックバランニ申上ゲマシテ……
- ⑧ 物理的場面
コンナ夜分オソクニ申シ訳アリマセン，緊急ナ用事デスノデ……
- ⑨ 心理的場面
オトリコミノトコロ申シ訳アリマセンガ，重要ナ用件ト存ジマシ
テ……
- ⑩ 接触状況・媒体
本来ナラバオ目ニカカッテ申上ゲルベキトコロ，オ電話デ失礼シマス。
- ⑪ 言語行動の目的・動機
細カナ所マデオワカリイタダキタクテ，クドクドト言ッタワケデス。
- ⑫ 言語行動の結果・効果
(アンナコト言ッタモノデ) トンダゴ迷惑ヲオカケスルコトニナッテ

シマッテ申シ訳アリマセン。

このほかにも、単独の発話という言語行動にとどまらず、会話のやりとりをめぐる規範について言及するもの（オ言葉ヲ返スヨウデ恐縮デスガ……など）、あるいは狭義の言語行動に付随する非言語的な行動について言及するもの（オ茶ヒトツ差シ上ゲモシマセンデ……、ネクタイモナシデ伺イマシテ……など）というように、メタ言語表現は言語行動をめぐるときにさまざまなものごとを言及の対象にし得る。

小論の対象にする言語行動の種類という言及内容は、上に列挙したところからもわかるように、こうした広範なひろがりのうちごく一部分を占めるだけにすぎない。しかしながら、冒頭にも述べたようにこの種類のメタ言語表現は実際の言語生活においてしばしば現われ、それを定量的に実証することはいまのところ困難ではあるのだが、いくつかの分野の言語資料を検討したところでは、現代の日本語社会において、話しことばと書きことばを通じて、言語行動の種類に言及するこのメタ言語表現は、ほかの言及内容のものに比較して相対的に高い頻度で現われるものであると言ってよい。

2. 2. メタ言語表現を行う動機から見たひろがり

これとは別に、メタ言語表現がどのような動機のもとに発せられるものであるのかという観点からもそのひろがりをとらえることができる。この点について杉戸1989では次のような分類を試みた。

① 表現の内容とその伝達の過程の調整に配慮したメタ言語表現

言語による表現や伝達の内容、あるいはそれを表現し伝達するという行動の過程を、そのつどの基準に照して整えよう（たとえば正確に、明快に、美しく、婉曲に、など）とする配慮に支えられたもの。

- 例・コレカラ説明スル〇〇ノ問題ハ、サッキモ言ッタヨウニ大変ムズカシイカラ注意シテ聞クヨウニ。（伝達内容の主部や述部への言及）
- ・課長ゴ指摘ノ点ハ、オッシャルトオリ当方ノ誤解デス。（同上）
 - ・言ウマデモナク、今回モ、ツライ旅ニナルダロウ。（判断内容への言及）

- ・ 加藤ニ替ワリマシテ、私ノ方カラゴ説明イタシマス。（行動主体）
- ・ 以上ハ简单ナ質問デスガ、ココカラハ注文ニナリマス。（行動の種類）
- ・ 平成3年度ノ予算案ヲ議題トイタシマス。（話題内容）
- ・ 会議ハ1時カラ第2会議室デ開キマス。（物理的場面）
- ・ ココデコノ問題ヲ取上ゲルノハ、全体ヲヨリヨクゴ理解イタダキタイカラデス。（行動の目的・効果）
- ・ 発言スル人ハ、ソノ場ニ立ッテ、マイクヲ使ッテクダサイ。（言語行動に随伴する、非言語的行動、副言語的行動）
- ・ レポートハ、A4版ノ用紙ニ、鉛筆以外ノ筆記用具ヲ使ッテ、郵送デ提出シテクダサイ。（同上）

② 人間関係の調整に配慮したメタ言語表現

その言語行動場面にかかわる人的要素（話し手自身・話し相手・話題に関与する人・ワキにいる聴衆など）に対する行動主体の待遇意識や対人関係の認識にふさわしい形で言語行動を行なおうとする配慮に支えられたもの。

例 前節 2. 1. に列挙したものは、すべて、それぞれの言語行動の成立要素にまつわる表現主体の待遇表現意識に由来していると考える。

（杉戸1983a）

③ 言語生活上の規範に配慮したメタ言語表現

上の①、②で配慮される基準（正確さ、明確さ、美しさ、待遇表現的な規範など）以外の、言語生活・言語行動をめぐって言語社会に存在するいろいろな規範に対する配慮に支えられたもの。

例・ ソウイウ大切ナコトハ、代理デナク、本人ガキチント申出ルベキデス。（行動主体）

- ・ コノ書類ハ、俺ノ受ケ取ル筋合イノモノジャナイ。（行動の受け手）
- ・ コレハ向コウカラノ照会ニ応エルワケダカラ、通達デハナクテ、回答ト書イテオクノガ本当ナンダヨ。（行動の種類）

- ・食事ノ席デ交通事故ヲ見タトキノ話ハ適當ジャーナイヨ。(話題)
- ・コンナ大切ナコトヲ, 電話一本デスマセルノハマズイ。キチント文書ニマトメテ, ソレモ持参シテ直接説明スベキダヨ。(媒体・接触状況)

それぞれの区分の詳しい内容については杉戸1989にゆずるが、小論の扱おうとする言語行動の種類に言及するメタ言語表現は、どの区分のものとしても現われ得ると言える。実際の言語資料において、こうした区分によるメタ言語表現がどのような偏りや分布で現われるかは今後の課題であり、小論でもその一部を検討することになる。

言語行動に言及するメタ言語表現のひろがりをもどのようにとらえ、そのなかで言語行動の種類について言及するものをどのように位置づけるかについては、ここで考えた二通りの観点のほかにもさらに検討すべきであるが、ここではこれ以上立ち入らない。

3. 言語行動の種類を明示するメタ言語表現の、その種類

つぎに、言語行動の種類を明示するメタ言語表現にはどのような種類があるのかをおさえておく。本来であれば、実際の言語資料を多方面にわたって十分な量について検討したのちに得られるはずの知見であろうが、そのような作業を始める段階での当面の手がかりをここでは二つの視点からまとめておきたい。

3. 1. 言及される側の言語行動が明示的なものとして存在するかどうか

なんらかの言語行動について言及するメタ言語表現であるからには、その言及の対象となる(つまり言及されるところの、オブジェクティブな)言語行動がどのような形で言語場面に存在しているかという観点は、メタ言語表現を記述する手がかりとして重要であろう。そのうち比較的大まかな基準として、言及される言語行動が明示的なかたちで言われたり書かれたりしているかどうかという基準がまず考えられる。ここでは、この基準により次のような3区分をメタ表現について考える。

- ① 言語行動の種類を意味する動詞（ないし動作性名詞）を含んだ言語表現だけが明示的に存在するだけでそこでの言語行動が完結するケース。言及されるところの言語行動とメタ言語表現とがいわば一体となって現われている、とも言えるが、形の上ではメタ言語表現だけが現われていると言えるもの。

例・オ願イシマス!（と言って、筆記具を渡し街頭署名の記入用紙を差出す）

- ・オ断リシマス!（と他人の申し出を拒否する）
- ・心カラオ喜ビヲ申上ゲマス。（と言うだけで、オメデトウ、ヨコッタネなど祝いの言葉そのものは言わない）
- ・謹賀新年（とだけ書いた年賀状）
- ・謹ンデオ悔ミヲ申上ゲマス。（と言うだけで、ゴ愁傷様、寂シクオナリデショウ、オ力オトシノナイヨウなど悔みの言葉そのものは言わない）

- ② 言及の対象となる言語行動（その言語表現。下の例で下線のない部分）が明示的なもののうち、その言語行動がどのような種類（機能）であるかを示す明示的な言語形式（メタ言語表現形式でない形式）がその中に存在しないケース。この類の言語行動に言及するメタ言語表現は、言語行動の伝達機能を明示する上では、原理的にその言語場面で不可欠の要素であるが、それと同時に、待遇表現的あるいは文体論的な表現効果ももたらすものと解釈される。

例・オ誘イスルノデスガ, 展望台ノアル頂上マデハスグデスヨ。（メタ表現がなければ、説明なのか、案内なのか、勧誘なのか、不明）

- ・一ツノ例トシテ拳ゲルノデス。夏山ハ危険デス。（少なくともことばの上では、禁止とか忠告ではないことが明示される）
- ・……………以上ガ前置キデス。コレカラサキガ本論デス。
- ・……………アラタメテマトメテオクト次ノヨウナコトナル。
- ・……………結論ヲ箇条書キデ列举スルト以下ノ通りデアル。

(いずれも、前置き、本論、まとめ、結論などであることは、言及された当の言語表現の中では非明示的であるのが一般的である)

- ③ 言及の対象となる言語行動(その言語表現。下の例で下線のない部分)が明示的なもののうち、その言語行動がどのような種類(機能)のものであるかが、当の言語表現自体のなかで明示的な言語形式(メタ言語表現としての言語形式でなく)によって表現されているもの。この類の言語行動に言及するメタ言語表現は、言語行動の伝達機能だけを考える上では、原理的にその言語場面では余剰的なものであり、待遇表現的あるいは文体論的な表現効果をもたらすものと解釈される。

例・お願いシマス。ココニゴ記入クダサイ。(依頼であることはクダサイという非メタ表現から了解される)

- ・ココニゴ記入クダサイマスヨウお願いシマス。(同上)
- ・チョットオ伺イシマス。駅へハドノ道ヲ行ッタライイデショウカ？(質問であることはドノ、～カ？という非メタ表現から了解される)
- ・コレハ命令ダ。明日カナラズ来イ。(命令であることは来イからわかる)
- ・理由ヲ言エバ、時間ガナイカラナノデス。(理由説明であることはカラナノデスにより明示的である)

もちろん、このほかに、メタ言語表現がまったく現われず、言及されるべきオブジェクト的な言語行動だけからなるケースも日常的に存在する。たとえば、「アブナイッ!」「アー暑イ」「セーフ!(野球の審判の判定)」「オハヨウゴザイマス」などのような、感情の直接表出、宣告、あいさつなどの言語行動はそのような現われ方が通常であるし、一般的な事実や個人の思想・意思を叙述する言語行動では、とくにその伝達のありかたをとりたてて意識しないかぎりには、メタ言語表現は伴わない場合が多いだろう。メタ表現の現われ方を分類しようとする小論ではこのケースは当面考慮の外とし、以上の三つの場合をあらかじめ区分しておく。

なお、いわゆる発話行為論、遂行動詞研究などの分野ではとくに英語動詞を手がかりとして、小論でいう言及対象の言語行動の分類がいくつも提案されている（Austin 1962, Searle 1969, 西山 1983, 山梨 1986, Wierzbicka 1987 など）。小論では、語としての動詞だけに限らないメタ言語表現を具体的にみようとする点でこれらとは異なる。英語においては遂行動詞を主動詞とする文構造（to 不定詞の句構文も含めて）の表現によってその言語行動の種類（いわゆる発話行為の種類）を明示するという言語構造上の一つの型が指摘できる。これに対して日本語においては、動詞だけに限定せず動詞を中心にした句や節、あるいは独立した文としてのメタ言語表現に注目することがより必要になる。

3. 2. 通常の発話や文の形をとるメタ表現と、標題や記号のような形をとるメタ表現

言語行動の種類を現わすメタ言語表現は、前節までに主として例示したような通常の発話や文の形をとっているものばかりではない。実際の言語生活の中では、たとえば公文書の標題に掲げる文書の種類の表示や、立て札・ポスターなど掲示物の題目表示などのように、言語行動の種類を意味する動作性の名詞だけを目立たせた表示がしばしば登場する。たとえば次のようなものである。

「注意 コノ土手ニ登ッテハイケマセン」(立て札の見出し)

「ご案内 プールハ地下ニゴザイマス」(案内掲示の見出し)

「お知らせ 月末マデ臨時休業イタシマス」(店頭の掲示)

「使用上ノご注意 毎食後30分ゴトニ2錠ズツ服用ノコト」(薬の箱の説明)

「平成3年度事業計画書の作成について (依頼)」(公文書の標題)

「住民票交付申請書」(書類の名前の表示)

【例】、[注]、<謝辞> (論文や文章の中での略号的な表示)

「ハシガキ」「マエガキ」「ハジメニ」

「本論」「各論」「考察」「結論」

「アトガキ」「オワリニ」「マトメニカエテ」（以上、文章や書物の章、節の表示）

この種のメタ言語表現の現われる言語場面やメディアは、上記のとおりある片寄りをしめず。杉戸1983b, 杉戸1985などにおいて公文書におけるその種類の明示的な表示を検討したところ、一般に発信者や受信者の存在を前提とした文書性の高い文書にはこうした表示が多く、他方、帳票性の高い書類には表示が相対的に少ないなどという対比が指摘された。メタ言語表現を現実の言語生活の中でとらえて記述していくためには、こうした形のものをはじめとして、前項までのような通常の発話や文の姿をしていないもの存在にも注意を払うべきであろう。

以上、言語行動の種類を明示するメタ言語表現のうちわけを、当面の手がかりとして二つの視点からまとめた。日本語におけるメタ言語表現についての研究は、理論的にもまた実際の言語資料を土台にした形でも、いまだ十分に展開されていないというべきだろう。ここまで述べてきた手がかりは、たとえば小論で以下に試みるような実態記述を重ねることにより修正・充実させていくべきものである。

4. 専門的文章における現われ——事例としての『言語生活』巻頭論文

4. 1. 視点と仮説

前節までに述べた種類のメタ言語表現について、われわれはこれまでいくつかの種類の書きことば資料を対象にして実例を収集し整理を継続してきた。各種の公文書（前掲）、私的な書簡、小説、あるいは各種著作物のまえがきの類などのほか、学術的、専門的な文章も対象としてきた。シナリオや脚本、あるいは実際の会話録音など話しことばの分野についてもその作業を拡大してきている。これらのうち、小論では、専門的な内容や執筆姿勢を基調としてまとめられたといえる一群の文章資料を取りだして検討する。具体的には、ことばの専門誌『言語生活』の巻頭論文である。ひとくちに専門的な文章といっても、文字どおり専門的な学術論文から概説的、啓蒙的、随筆風の

ものまで、その種類はさまざまである。こうした中で、ここで扱う『言語生活』の巻頭論文も、雑誌の毎号の特集テーマのいわば総論をなすような内容である場合が普通で、概論的、啓蒙的な姿勢でまとめられたものが多い。しかしながらなお、ほかとの比較の上では専門的な文章と見なすことができると思われる。われわれは、このほかに、より専門性や学術論文性が高いと言える学会機関誌『国語学』（国語学会）の掲載論文をも資料収集の対象としてきているが、そうしたものととの比較検討は今後の課題として、今回は、やや雑多な種類の存在をあらかじめ考慮に入れつつ、『言語生活』所収論文を選んだ。

専門的な文章を検討の対象とするについては、その叙述の姿勢に関して次のような仮説的な見通しを前提としている。すなわち、専門的な文章は、内容的な素材としてのさまざまな事実や考えがその表現と伝達の中心的な関心事であるという意味で、素材中心の文章という性格が強いと言えると考える。これに対比すべきものとしては、たとえば日常的な会話においてさまざまな対人的なはたらきかけ（要求、依頼、質問、応答、叱責、謝罪、など）を中心的な関心事とした種類の言語行動があげられる。こうしたなかで、問題のメタ言語表現は、それぞれの種類の文章や言語行動の主たる関心事をできるだけ十全な形で叙述・表現し、かつ相手に伝達しはたらきかける上での効果をもたらすために、それぞれ重点的に準備されると考える。つまり、2. 2. で前述したメタ言語表現の動機をいま一度ふりかえると、表現の内容・素材そのものやこれを伝達する言語行動のプロセスを調整するとまとめられる種類のメタ言語表現は、上に述べた意味で素材中心というべき性格の強い文章に現われやすく、一方で、言語場面にかかわる人的要素の間の人間関係の調整を動機とするメタ言語表現は、対人的なはたらきかけを関心事とする言語行動の方に優勢であろうと考えるのである。

ことばを換えて少し具体的に言えば、どのような内容をいま述べようとしているのか、どのような述べ方で述べようとしているのか、そこで述べていることがらには内容全体の中でどのような位置を占めるものであるのか、ある

いは逆に、そこではどのような内容は述べないか、といった表現や伝達の内容そのものについてのメタ言語表現が、ここで扱おうとする専門的な文章を初めとする素材主体の文章（言語行動）には、相対的に多く見られるはずであるという見通しである。

以下、このような立場から、具体的なメタ表現の現われ方を記述検討していく。当面は、どのような形式と種類のものが現われるか、前後にどのような内容の言語表現をともなって現われるか、文章の中のどのような位置に現われるか、など、文章の比較的表層的なレベルでの現われを記述することとする。

4. 2. 対象とした資料と事例採集の手順

“ことばについて考える雑誌”として長く親しまれてきた月刊雑誌『言語生活』（筑摩書房）は1988年3月で休刊となった。ここでは、創刊号（1951年10月）から最終の436号まで、途中一時期の休刊をのぞき、巻頭論文（第一論文）400編あまりを対象にした。

事例採集にあたっては、文章記述にかかわる書き手の行動そのものの表現に注目し、下記の点を（もちろん、それだけを排他的に選ぶという意味の条件としてではなく）考慮にいれながら、原則として文単位でカード化した。

- ① 文章記述の言語行動を意味する動詞に注目する。「言う」「述べる」「まとめる」「付言する」「紹介する」など。
- ② 文末表現として、書き手の意志的な言語行動を表現するものに注目する。「述べてみたい」「まとめようと思う」「例を挙げることとする」など。
- ③ その言語行動の主体は論文の書き手自身であること。

こうした基準によって、著者自身が論文中でいまだどのような言語行動をしているか、あるいはその論文のなかでどのような言語行動をしようとしているかを説明や宣言の形で明示する表現を探すわけである。個々の表現について言えば、もちろん、取捨選択に迷う場合がないわけではない。そうしたなかで、ある程度まで典型的に現われる次のような表現は、（少なくとも今回

は) メタ言語表現としては採集対象とはしなかった。例の末尾の括弧内は雑誌の号数・出版の西暦年下二桁・月・著者名を示す。

① その論文の範囲を超えて、今後の希望や将来の展望を述べる表現

例 「日本語の新しい綴字法を考えて見たいものです」(60・56・9
鈴木)

② 読み手への依頼表現

例 「次の詩を見てもらおう」(44・55・3 吉田)

③ 章や節の標題

例 「まとめ」「しめくくり」「論点の提示」など

1枚のカードには1文を記載することを原則とした。重文のなかに二つのメタ言語表現が含まれているもの、あるいは複文の従属文にもメタ言語表現があるものはそれぞれ別のカードに記載し、独立した例と扱った。対象論文を全文にわたって用例を採集しカード数は900あまりに達したが、こののち検討を進める中ではこれらのほかにもメタ言語表現と認定すべきものを採集していなかったり、逆に将来は除外すべきものを含めていることが考えられることを断っておく。

4. 3. メタ言語表現における文末

収集した実例(921例)を、採集の一つの指標とした書き手の意志的な言語行動を表現する文末形式により分類した結果が<表1>である。

文末形式でみると、～シテミヨウの型が一番多く、次に、～シテミタイ、～シヨウ、～スル、～シタイの順である。度数の比較的多いものうち、～スル、～シテミル、～シテオクなどは書き手の意志という意味が明示的ではないが、それ以外は書き手の何らかの意志が明示されていると言える。今回の資料に関して出現度数の比率に言及することは(資料収集の範囲や該当例だと認定する基準になお暫定的な面を残していることから)避けるべきであるが、それでも、比較的に出現度数の多いものには明示的な意志表現を含むものが並び、他方、～シテミルコトニシマス、～スルニトドメル、～シタ次第デアルなどそれが明示的でないものの度数は低いという傾向が指摘で

表1 メタ言語表現の文末表現（数字は用例数。括弧内は内数。）

～してみる系	340	～してみよう (169)	～してみたい (98)	～してみる (25)
		～してみることにしよう (20)	～してみましよう (15)	
		～してみることにする (8)	～してみることにしたい (5)	
～する系	188	～する (85)	～するにしよう (33)	
		～することにする (40)	～することにした (5)	
		～することにした (25)	～するにとどめたい (5)	
～しておく系	175	～しておこう (66)	～しておきたい (66)	～しておく (40)
		～しておくことにしよう (3)		
～しよう・したい系	170	～しよう (88)	～したい (82)	
～していく系	25	～していこう (17)	～していきたい (8)	
～させてもらう系	12	～させていただく (9)	～させてもらう (3)	
～した次第である	3			
～をお詫びする	3			
お礼申し上げます	3			
お許しを乞う	2			

きる。こうした文末に先行するいわば主動詞にあたるものの意味内容にもよるが、基本的には、メタ表現においては書き手がそこでどのような言語行動をしよう（したい）と考えているのかが明示されることが多いという指摘が可能であろう。実際、＜表1＞のうち～タイが末尾に付いた形式は合計289例でかなりの比率を占める。

表現形式の類型という点からすれば、＜表1＞にまとめたように、～シテミル系、～スル系、～シテオク系、～シヨウ・シタイ系という四つの型に大きく分類されることも指摘できる。メタ言語表現の文末形式の特徴と言えよう。

4. 4. メタ言語表現のなかの中心的な動詞

文末形式に先行する動詞について見たのが＜表2＞である。ここには、採集した用例（基本的に動詞文である）の中心的な動詞を現在形で見出しとして、五十音順に配列した。各動詞には、それぞれがどういう連用修飾要素に（副詞的に）修飾されているか、および、どういう要素を目的語（句）として支配しているかを列挙した。副詞的な修飾要素の群の先頭には△印を、目的要素の群の先頭には◇印を、整理のために掲げた。いずれも、採集した異なりのバラエティを挙げてある。なお、ここでの整理では「先に挙げた○

○)「次にふれる○○」など連体的な従属句に続く「○○」に当る部分は目的要素から除外した。

見出しとして並ぶ動詞は全部で171種類である。これらの多くは、それ自体がなんらかの言語行動を自ら意味するところの、いわゆる言語行動に関わる遂行動詞とよぶべきものである。もちろん、たとえば「出発する」「素通りする」「立ち返る」「進む」などのように、それだけを見れば言語行動に直接言及する動詞とは(必ずしも)言えないものも含まれる。しかしながら、その動詞の目的要素や副詞的修飾要素を合せて見るならば、「～という点から出発する」「～の点に立ち返る」「本題に進む」など、文章を書き進む上での書き手の行動(比喩的なものも含めて)を意味するものであることがわかるであろう。表の中には「眼を移す」「筆をおく」「声援を送る」など慣用的な動詞句として見出しにしたものもあるが、これらも動詞だけではもともと言語行動を意味しないものであり、そのような動詞句として言語行動に関する遂行動詞の性格を有するものである。

<表2>を動詞を含む句や節のまとまりで見えていくと、表現の類型としては次のような五つの型に大きく分けられそうである。

- ① そこで扱おうとする話題内容に明示的に言及する表現(その言語行動の動作そのものを取りたてて明示するのが主目的ではないような表現)
「ここでは～について話す」「～を分析する」「ここでは～に触れる」
「本論では～について考察する」「この稿では～を追う」「ここで～を指摘する」など
- ② 論文の文章としての流れや構成にかかわる言語行動に言及する表現
「～から話を始める」「次に～に移る」「本題に進む」「これで切上げる」「稿を終える」「～をまとめる」など
- ③ 文章を構成する作業の単位としての言語行動に言及する表現
「例を挙げる」「～を引用する」「言い足りない事を補う」「原文のまま掲げる」「～を計算する」「～について付け加える」「一例を抜き出す」など

表2 メタ言語表現に現われた動詞とその修飾要素

	(△印：副詞的要素)	(◇印：目的要素)
あきらかにする	△ここで、ここでは、ここに、その前に	◇それを、～と～とを、～との関係を、～の概念を、～の相違点を、論争の対立点を、～を
挙げる	△以下には、以上、以上のほか、終わりに、ここで、ここでは、ここに、今度は、最後に、最初に、次に、まず	◇1、2の例を、一例として、一例だけを、一例を、主な点を、主な方面を、主なものを、実例を、実例を2、3、実例を一つだけ、若干の例を、諸点を、特徴を、2、3の例を、2、3、問題になりそうなものを、～の例を、一つの例を、例を、例を1、2、～をいくつか、～を若干、～を一つ、～を一つづつ、～を二つだけ
当たる	◇2、3のものに	
あてはめる	◇考え方を	
言い添える	△終わりに	◇～のことを、ひとこと
言う	△簡単に、第一に、第二に、次のように、強く	◇遠慮のないところを、～だけは、～だけを強く、～と、～ということ
一言する	△第三に	◇～について、～を
一瞥する	△ここで	◇～を
一例とする	◇～を	
引用する	△以下に、ここに	◇第二パラグラフを、～について述べた部分を、2、3の箇所を、～を少し、～のいくつかを、～の発言を、その問題を、～を3、4
引例する	△ここで	◇～を2、3
移る	△次に、ここで、ここでは	◇～に、～の検討に
追う	△この稿では	◇～を
追いかける	△ここでは	◇～を詳しく、～を少し
終える	◇稿を	
補う	◇言い足りないことを	
おく	◇～の問題は一応	
押さえる	△ここでは、簡単に	◇～を
おしゃべりをする	◇～について	
お願いする	△合せて	◇その点
お詫びする	◇枚数の都合で触れ得なかったことを、貧しい論にとどまったことを、十分それを生かすきれなかったことを	
お詫びをする	◇～に	
終わる	◇長話を、この文を	
概括する	◇～について、～を	
概観する	△以下、以下に、次に、本稿では、本節では	◇～について、～を
解説する	△簡単に	◇～を
省みる	△ここで	◇～を
変える	◇話題を少し	
返る	◇最初の問題に、～に	
掲げる	△原文のまま、参考のため、次に	◇例を、～を
書き添える	△念のために、もう一度	◇～を
書き直す	△あらたに	◇この項を

書く	△ここでは ◇～について、～の一部を、～をもう少し、
確認する	△あらためて、結論的に、まず ◇～ということを
割愛する	△ここでは、紙数の都合上 ◇これについても、～は
考える	△以下、以上は、いま少し、いまはひとまず、終わりに、ここから、ここで、このたびは、今度は、最後に、さしあたり、さらに、章をあらためて、たとえば、ついでに、次に、次には、ともかく、～の立場において、ひととおり、ふたたび、本稿では、まず、もう少し、話題を限って
観察する	◇～から、～だけについて、～に限って、～に関する問題を、～に重点をおいて、～に立ち戻って、～について、～のことを、例を～に限って、～を
記述する	△ここではまず、ころみに ◇～から、～について、～を
記す	△以下の各節で、紙数も少なくなっているの、もう一つ、
切り上げる	△一例として、思いつくままに、ここでは、 ◇～を
切り取る	△前置きが長くなったが、これで
強調する	◇問題を
吟味する	△以上、ここで特に、ここでは、再度、特に、とりあえず ◇～を
比べる	△もう少し ◇～を
加える	△ここで ◇～と～を、～を～と
計算する	△ここでもう少し ◇右の見方に、検討を
言及する	△まず ◇～について、～を
検討する	△折にふれて、ここでは、ただ一言 ◇～に、～にも、～の一端にまで
	△あとで、ここで、ここでまず、具体的に、具体例に即して、若干の実例で、まず、もう少し、やっかいだが、例を挙げて ◇この点を、～について、～を
乞う	◇お許しを
公開する	△最初に ◇～を
考察する	△以下、以下において、ここで、ちょっと、ついでに今少し、次に、本稿では、本稿としては、本稿は、まず
	◇この点について、～について、～の実態を、～を、～を中心に
考察を行なう	△ここでは、本節では ◇～の、～について
考察を試みる	△このような前提の下に ◇若干の
稿の結びとする	△以下～を列挙して
稿を閉じる	△～を今後の課題として
稿を結ぶ	△～を付け加えて
断わる	△予め、ここで、最初にまず、はじめに、まず ◇～であることを
採録する	△ここに
再録する	△ぜひとも ◇要旨を
探る	△以下に、まず ◇今後の論争のゆくえを、～を
さける	△ここでは、ここには ◇重複を、論及を、
定める	◇～とは～というように
実証をする	◇その
指摘する	△ここで、ここでは、最後に、最初に、特に ◇～だけを、次のことを、次の点を、～という論点を、～を
締め括りとする	◇～についての論考の
示す	△以下において、ここでは、最後に、次に、まず ◇一例だけを、一例として、少し例を、～について、～の一つを、文例の一つを、～を

祝福する ◇～のために
 出発する △仮に、まず ◇～という点から
 紹介する △一応、かいつまんで、簡単に、具体的に、具体例として、ここで、ここでは、ここに、この機会に、最後に、そのままに、次に、やや詳しく
 ◇主な点を、若干を、～について、～を
 紹介を行なう △ここでは ◇～の
 詳述する △あとで、のちに ◇～については
 省略する △ここでは
 小論を閉じる △ここで最後に △～をとりあげて
 調べる △以下に ◇～を
 するす △簡略に ◇～について
 推論をする △最後に ◇～について若干の
 進む △次に、本題に
 進める △ごく卑近なことから ◇話を、論を、考察を
 素通りする ◇～は
 声援を送る
 整理する △これを機会に ◇考えを、～だけでも、例を、例を集めて、～を
 説明する △以下、簡単に、更にくわしく、次には、まず ◇～について、卑近な例で、～を
 対照する △次に ◇～だけを
 出す △今度は ◇～の例を
 たずねる △まず ◇由来を
 立ち返る △もう一度 ◇～という点に
 立ち戻る △急ぎ ◇本稿の課題に
 たどる △あとはかけあいで、次に簡単に ◇～を
 注意する △あらかじめ、まず ◇～している点に、次の点に、～という点を、～を
 注記する ◇ひとことだけ
 注釈をする ◇二つ三つ
 注目する △ちょっと、特に ◇～に
 調査する ◇～を
 作る ◇例を、～を
 付け加える △簡単に、ここでは、最後に、更に、一言、もう一言 ◇～についても、～を
 伝える ◇エピソードを
 続ける △ついでに ◇話を
 提案する ◇～として
 提案をする ◇～のコツとして三つの
 提起する ◇問題を
 提言する ◇ひとつの方法として
 呈出する △ここに ◇一つの試論を
 説く △ここでは
 特記する ◇～として
 とらえる △巨視的に ◇～を
 取り上げる △以下、ここでは、ここに、ここには、最後に、次項では、次には、特に、まず ◇～だけを、～という問題を、～に関する問題を、～について、～の

	問題を、～も、～を
取り扱う	△最後に、本稿では ◇～を
取りかかる	△まず ◇～から
取り出す	△この節では、たとえば、次に ◇～を
とる	◇～から、～に例を、～の例を、～を例に
眺める	△以下、以下に、ここでは、順次に、まず ◇次のふたつの観点から、～を
名付ける	◇～を～と
抜き出す	△一例を
のぞく	△以下に、ほんの少し ◇～を
述べる	△以下、以下では、以下に、以下には、以上、以上は、簡単に、閑話休題、ここで、ここには、この稿では、この節では、最後に、拙稿では、次に、入念に、後に、本稿では ◇あらましかけを、主な点について、主なものについて、解釈を、概略を、経験の一端を、私見を、事実を、所感を、随想の一端を、大略を、多少の感想も、～について、～について私見を、2、3の特徴について、卑見を、要領を、～を
排除する	△あらかじめ ◇～は
入る	△ここで、この辺で ◇結論に、考察から、～に、分析に
始める	◇～から、～から話を、はっきりさせるために
話をする	◇～調査から実例を挙げて
話す	△具体的に、ここで ◇考えのひとつふたつを、～について、～を
省く	△与えられた紙数の関係で、今は、関係が少ないから、そろそろ許された紙幅が窮屈になっているので、本稿では、 ◇～は
反問する	◇～と
比較する	△たとえば ◇～と～によって、～を
比較を行なう	△本節ではまず ◇～の
比較をする	◇それらの～について
引き戻す	△ここで ◇話を～に
引く	◇～から1か所、注意を、例を、～を
拾い上げる	△以下順次 ◇～を
拾う	◇～から～を、数例を～から
披露する	
付記する	△ついでながら ◇～を
付言する	△ここで、最後に、少し ◇～を
筆をおく	△一応ここで
振り返る	△概念を明確にするため ◇全体を、～について、～を
触れる	△以下、以上、簡単に、ここで、ここでは、今回は、最後ではあるが、最後に、最後に一つだけ、少し、次に、一言 ◇概念に、全体の流れに、特徴に、～に、～について、～の問題に、問題点に
プロボウズする	△ここで ◇～を
分析する	△～を考えるために ◇行動を、傾向を
分類する	△参考のために、便宜のために ◇～を
瞥見する	◇～の特徴を
報告する	◇結果を

補綴を試みる	△ここで △若干の
まとめる	△この文では、次に ◇2, 3, ~の分析を, ~を
見直す	△今 ◇~を
見る	△今, 以下, 簡単に, 詳しく, ここで, ここでは, ころみに, 最後に, 次に, ~について考えるために, はじめに, まず ◇1, 2の例について, 実例について, 焦点を~に限って, ~だけについて, 次の例を, ~について, ~につき, ~の傾向を, ~の場合を, 問題点を, ~を
見渡す	△一通り, 次にざっと ◇~について, ~を
むかう	△ふたたび ◇~論へ
明確にする	◇~をいささかでも
眼を移す	△次に ◇~に
目を転じる	△その次に ◇~に
目を向ける	△ここで ◇~に
申し上げる	△少し ◇あつくお礼
申し述べる	△ここで ◇~について所見を
申す	△まず ◇~だけ, ~を
もどす	△ここで ◇話を~に
もどる	△ふたたび ◇当初の問題意識に, 本題に
問題提起をする	△ ここで ◇~について一つの
問題にする	△ここでは, 次に, まず ◇~を, ~ということ
訳す	◇~と
やめる	
やる	△ここで, 次に ◇~に対する評価を, ~を
ゆずる	◇後段に, 諸論文に
要約する	△最後に ◇以上に述べたことを, ~を
予測をする	◇~についていくらかの
呼ぶ	△ここで ◇~を~と
略述する	◇~を
利用する	△ここで ◇もう一度
類別する	△以上 ◇~を
列記する	△最後に ◇~の一端を
列挙する	△以下, 今ここには, 終わりに, 簡単に, ここで, 順に, 次に, 老婆心ながら ◇~を
論じる	△以下, ここでは, すでに ◇~から, ~について, ~については, ~を, ~を中心として
論を起こす	△~の検討から

④ 作業単位を含む論文構成への言及（②と③の混成）

「例をあげて説明する」「実例を挙げながら考えて見る」など

⑤ 読者や関係者への対人的な配慮としての〈あいさつ〉的な言語行動についての言及

「～に触れ得なかったことをお詫びする」「篤くお礼申上げる」など

小論が収集の対象としたメタ言語表現は、概括して言えば言語行動の種類を明示するものと言えようが、その内訳を見れば以上のような種類が指摘できるのである。このうち①から④のものは、表現の内容・素材そのものやこれを伝達する言語行動のプロセスを調整する動機に由来する種類（前述）のものと言ってよいであろう。⑤は主として対人的な配慮に由来すると解釈される。

いま一つ〈表2〉で注目されるのは、こうしたメタ言語表現には副詞的な修飾要素として、時間的なあとさきの関係、あるいは論文中の位置やその場所的なあとさきの関係にかかわる内容のものが目立つという点である。たとえば、「最初に」「まず」「次に」「第一に」「第二に」「最後に」「ここでは」「以下に」「以上」などである。メタ言語表現の言及する言語行動の起る位置、タイミング、順序などを明示し、その言及をさらにわかりやすいものになっている要素だと解釈できよう。

4. 5. メタ言語表現の出現場所

メタ言語表現が文章のどのような位置に現われるかを、採集した用例の中から特徴的ないくつかを選んで見てみたい。

ここではメタ言語表現の出現場所を印刷上の行数で数えて、位置指数というべき数値を2種類算出した。

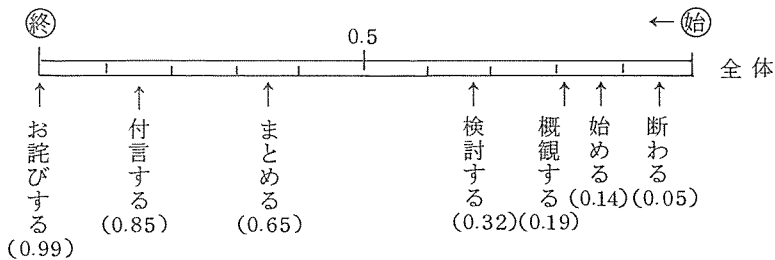
① メタ言語表現の動詞を含む行の、文章の最初からの行数を本文の全行数で除した数値

② メタ言語表現の動詞を含む行の、章の最初からの行数をその章の全行数で除した数値（章や節の構成がなければこちらは計算しない）

これらの数値はいずれもゼロより大きく1までの値をとるが、数値が大き

いほど問題のメタ言語表現が文章（全体および当該の章）の後ろの方に現われたことを意味する。行数は、図表、参考文献、注をのぞき、2段組や3段組の場合は各段ごとに行数を数えて加算して行数とした。

<図1>は、ある程度の出現度数を持ち、各用例の位置指数の平均値が特徴的な位置を示すような動詞を7種類選んで数直線上に示したものである。図で左の方にプロットされたものほど、平均して文の後ろの方に現われたものであることが示される。



<図1>

この図からわかるように、「断わる」(0.05)、「始める」(0.14)のように論文の最初の方に出現することが顕著なものと、「お詫びする」(0.99)のように全体の最後近くに出現するものがあり、その間に、それぞれ定位置のような出現位置をもつ場合があるらしいことがわかる。たとえば「概観する」(0.19)が論述が始まって全体の2割ぐらいまで進んだあたりで使われることや、本論に何事かを付け加える言語行動に言及する「付言する」(0.85)が、文章全体の最後の少し前に出現することなどは、それぞれの意味内容を考慮すると興味深い。これらは用例ごとの位置指数のばらつきも小さい(分散値は省略。以下同じ)。逆に、「まとめる」(0.65)や「検討する」(0.32)、あるいは図では割愛したが「取り上げる」(24例 0.31)、「触れる」(39例 0.51)、「紹介する」(25例 0.54)などの動詞は、用例は多いが全体の中でのばらつきが大きく、特徴的な位置を占めるものとは言いにくい。

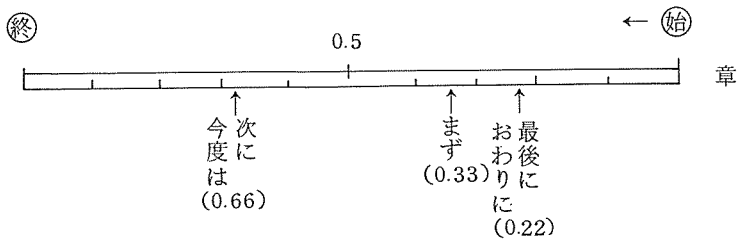
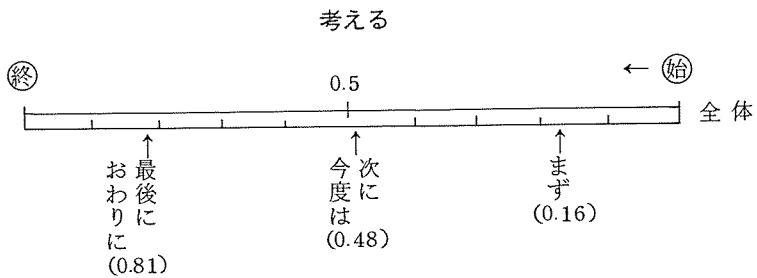
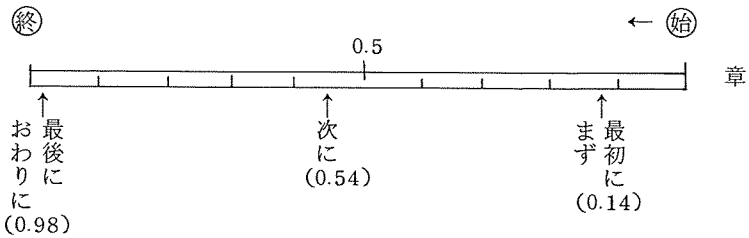
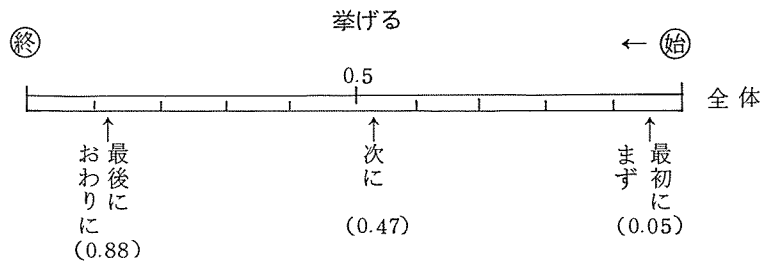
ところで前述の通りメタ言語表現には場所や時間にかかわる位置を表わす

修飾要素が共起することが多かった。そこで、この種の副詞と動詞とを組合せでとらえ、その出現位置を指数にして図示したものが<図2>である。

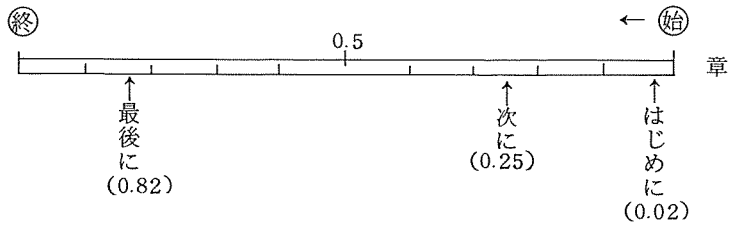
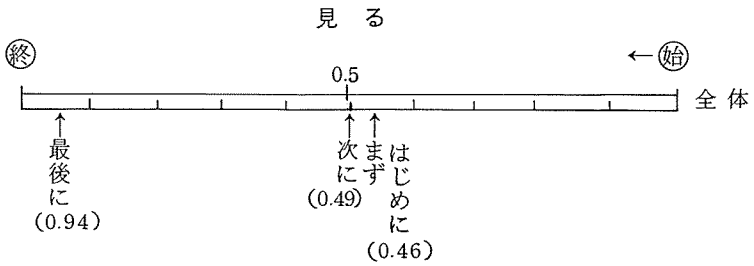
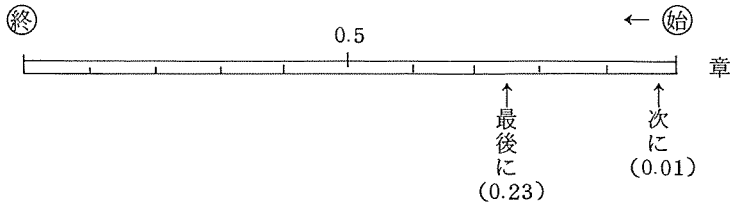
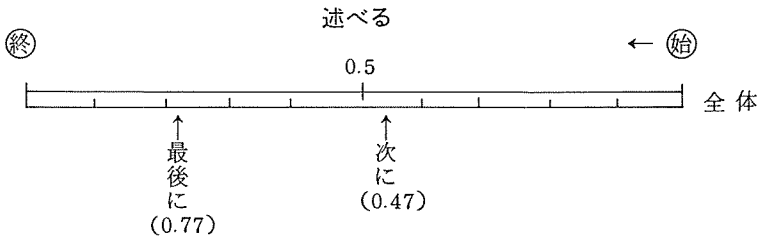
<図2>には4種類の動詞（それぞれ副詞とのまとまりで度数5程度以上のもの）について、「まず・最初に」、「次に」、「おわりに・最後に」の3群の副詞の出現指数を図示した。それぞれに、文章全体での指数と章単位の指数とを示した。全体行でみると、「最初に・まず」のつく「挙げる」「考える」は論文全体の前半部分に出現し、副詞とのかかわりの強さを示している（「述べる」は用例なし）。ただし「まず・はじめに」＋「見る」だけが中間部分（0.46）に位置していることは、たとえばどういう文末形式をとるかなど、もう少し長い文脈を見ないと説明できないように思われる。一方、「最後に・おわりに」と共起した場合の位置指数は、少なくとも全体の行数の中では安定していて、いずれも0.8から0.9前後である。

しかしながら、章ごとの中での位置は必ずしも単純ではない。とくに「最後に」＋「述べる」あるいは「最後に」＋「考える」の結び付きは、全体行では後半の中間部（0.8前後）に現われるのに対して、章単位では前半部分（0.2程度）に位置している。これは<図3>のような位置、つまり全体の中では後ろのほうの章の、その章の中では初めのあたりに出現することの多い表現であることがわかる。表現類型として言えば、「最後に」と限定しておいて、ひとくだけ「述べる」「考える」「挙げる」などの言語行動を行なって、しかるのちに文章全体を終えるという姿が見えるのである。

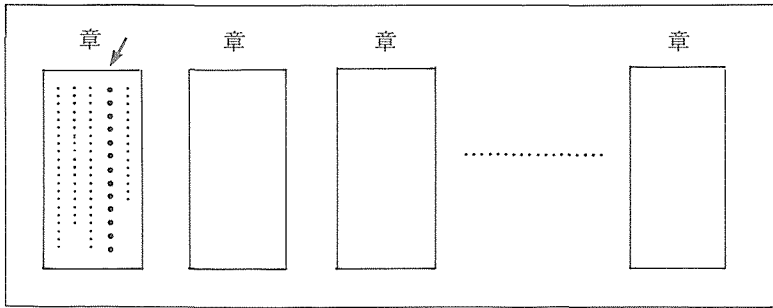
なお、この出現位置には問題のメタ言語表現が時制の上でどのような形をしているか（たとえば「以上、本稿では～について述べた」と言うか「以下、本稿では～について述べる」と言うか）が大きく関与しているはずである。小論ではこの点の詳しい検討は用例数の点で困難もあるので割愛した。今後の課題である。



<図 2 >



<図 2 続>



<図3> 「最後に」+「述べる」・「考える」

4. 6. マイナスの行動と行動の終りを明示する表現

4. 4. では、文章の内容や構成、作業単位などの観点からメタ言語表現を五つの類型に分けたが、これとは別の視点から次のような種類も指摘できると思われる。

メタ言語表現に含まれる動詞の多くは、なんらかの行動を積極的に行なうという意味においてプラスの行動（例えば「考える」「概観する」「列挙する」など）を表わすといつてよい。これとの対比で注目されるのは、なんらかの行動をくしない<>くはぶく<>くやめる<>などという意味でのマイナスの行動を表わす一群のメタ言語表現が存在することである。これらをもう少し細かに分類してみると次の3種類にまとめられる。

① プラスの行動を表わす動詞の打消し形によって、その言語行動をしないことを明示するタイプ。

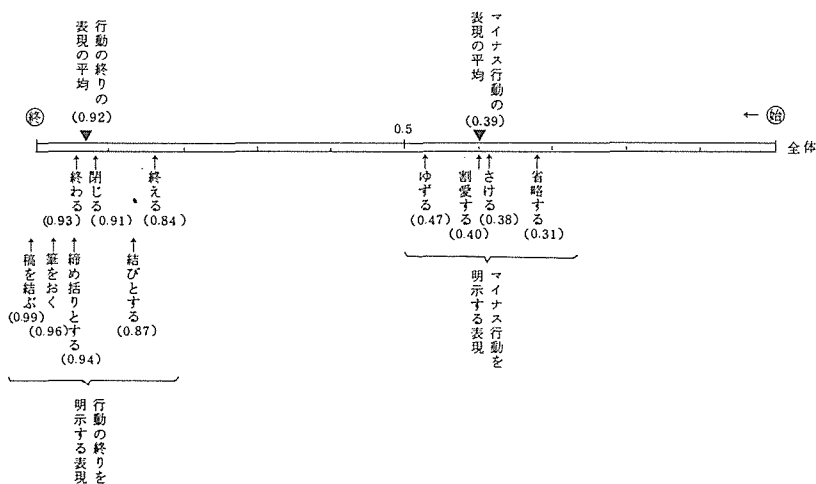
- ・また、与えられた紙面の関係で、右の金田一論文以下の内容の紹介はここでは行なわない。(312・77・9 馬瀬)
- ・ただし、ここでは、地元Ⅱや移住者との比較を行わず、地元Ⅰ、つまり生粋の東京人と生粋の大阪人との間の差について論ずることにする。(354・81・6 江川・米田)
- ・一般記号学のことは余り有名であるから、ここでは説かない。(55・5

6・4 矢田部)

- ・ 上述のような理由で、この短い文のなかではあえてとりあつかわないことにする。(391・84・7 石綿)
 - ・ このパラグラフで述べたことは基本的に私は賛成ですから、今回は深くは触れないでおきます。(320・78・5 野元)
- ② 動詞そのものがマイナスの行動を意味するものを用いて、「割愛する」「省略する」「排除する」「避ける」「やめる」という方向での言及をするタイプ。
- ・ そのほか～に関する事実にはいろいろあるが割愛しておこう。(195・67・12 黒田)
 - ・ ～については、くどいくらい入念に述べたのでもうやめようと思う。(296・76・5 根来)
 - ・ ～については、他日、別に愚見を述べようとするから、紙面の自粛上ここには論及を避けておく。(35・54・8 新村)
 - ・ 他にもいろいろな問題がありますが、以前に本誌で述べたことがありますから、ここでは省略したいと思います。(354・81・6 江川・米田)
 - ・ 数値を引用して説明するにはそろそろ許された紙幅が窮屈になっているので省かせていただこう。(90・59・3 水谷)
- ③ なんらかの言語行動の<終り>を表わす動詞を用いて、「終える」「閉じる」「稿を結ぶ」「筆をおく」「締めくくりとする」などの言語行動に言及するタイプ。
- ・ 以上をまとめ、～とのかかわりについて一言触れて稿を終えたい。(305・77・2 宮地)
 - ・ ここで最後に～という問題をとりあげて小論を閉じることにしよう。(336・79・12 宮本)
 - ・ ～を付け加えて、日本の言語地理学の発展を祈りつつ、この稿を結ぼう。(83・58・8 徳川)

- ・不如意ながら、一応ここで筆をおくことにいたします。(136・63・1 辻村)
- ・～を指摘して、～についての論考の一応の締め括りとしたい。(403・78・6 村上)

こうした表現も、文章を構成し作成する上での書き手の配慮や行動に（それがマイナス方向のものであっても）はっきりと言及するものである以上、プラス方向のものと同様に、その文章の伝達そのことにおいては積極的な機能をもつマイナスの言語行動が明示的に言及されたものだと考える。ひらたく言えば、「ここで何をするか」を明示するメタ表現と「ここでは何をしないか」を明示するメタ表現が大きく2分されるということである。



<図4>

<図4>には、こうしたマイナス行動を明示する表現のうち、上に②と③にまとめたタイプのものが文章全体のどこに出現するかを、前節と同様に示した。図で見るとおり、それぞれの行動表現が二つのかたまりを示していることがわかる。

言語行動の終りを明示する③のタイプの表現は、7つの表現形式が文章全

体の終末部分に集中し（その平均が0.92）、用例ごとのばらつきも少ないので、まさに全体の締めくくりに現われてその位置で文章が終わることを明示する表現になっていることが明らかである。

これに対して動詞自体がマイナス行動を意味する②のタイプは、平均として論文全体の間部分（0.39）の値を示すが、用例ごとのちらばりが大きく、安定したものとは言えない。文章全体の（あるいは章の）あちらこちらに出現させるメタ言語表現であると言えそうである。このタイプに属する動詞には、この他に「排除する」（0.13）、「切り上げる」（0.32）、「素通りする」（0.40）、「一応おく」（0.36）などがあるが、いずれも例が少ないため図示からは除いた。なお、ここでは扱わなかったが、「～しない」という①のタイプのメタ言語表現も②と同じような現われ方であると言えそうである。

5. おわりに——言語行動の由来や動機を考える手がかりについて

以上、専門的な文章という事例をとりあげ、そこで行なわれる言語行動の種類を明示するメタ言語表現を見てきた。どのような種類の動詞を核として、副詞的な修飾要素や目的格要素がどのような現われを示すものであるのか記述し、そこに見られるいくつかの特徴を指摘した。ここでこれらの内容をふたたび要約することはしない。

冒頭に、こうした言語表現類型を検討することは言語行動やコミュニケーションについて考えようとするとき有力な手がかりになるであろうと述べた。そうした段階に進むためには、ここで扱った専門的な文章のほかに、さまざまな種類の具体的な言語作品の中での現われを記述的に検討し知見を蓄積することが基礎作業として不可欠であることは言うまでもない。記述の観点も、小論では採用していない多くのものが必要となるであろう。そうした作業を土台にして、問題の言語表現類型のもつ表現上の機能、書き手がこの表現を発した意図や動機について、さらに考察を深める必要がある。2. 2. あるいは 4. 1. で示したここでの考えは、これまでに扱った範囲から帰納できそうな当面の考えであるに過ぎない。4. 4. で示した5種類の類型

も同様の限りのものだというべきである。一般に、言語表現のもつ機能や表現主体が託した表現意図をどのような枠組みや説明言語で記述するかは言語研究上の隘路の一つである。そうした記述の方法論的な検討も含めて今後の課題は大きく深い。

ここでは、最後に、そのような問題点のうち、当該の表現類型がどのような事情で（あるいは書き手のどのような動機で）発せられたかを考えるうえで有力な手がかりになるべき、当のメタ言語表現自体がその内部に持っている一群の（これまた）表現類型の存在を指摘しておきたい。理由表現とか事情説明とも呼ぶべき次の下線部分のような表現群である。

- ・ この問題をやや具体的に検討するために、一、二の～の例をとってみよう。(174・66・3 肥田野)
- ・ なお、おわりに老婆心ながら、～を列挙しておこう。(272・74・5 杉本)
- ・ 上のわかりにくい概括をはっきりさせるために、～から例をとって始めよう。(170・65・11 大森)
- ・ 全体について見ると煩瑣になるから、～だけについて見てみよう。(30・54・3 森岡)
- ・ そのため理解しにくいのではないかと思われるので、卑近な例で説明してみたい。(196・68・1 鈴木)
- ・ 誤解を防ぐために次の点に注意しておきたい。(29・54・2 服部)
- ・ ～については紙数がないので、結論の一点だけを述べることにする。(169・65・10 森岡)
- ・ ～については一々例をあげて説明する余裕がないので、興味のある例を一、二あげるにとどめておきたい。(249・72・6 伊地智)
- ・ このへんの整理は私にはまだついていないので、そこは素通りさせてもらって、先を急ぐ。(180・66・9 田中)
- ・ 混同を避けるために、～はあらかじめ排除しておきたい。(432・87・11 山口)

上例では、下線のない部分がメタ言語表現の中心部分であるが、それに先立つ下線部分はそれぞれそのメタ表現の言及する言語行動（プラス、マイナス両方）の理由とか事情を説明していると解釈できる。こうした内容の実例は枚挙にいとまなく得られるものである。もちろん、その理由や事情は、メタ言語表現そのものが発せられた理由や事情とは異なるレベルのものであり、あくまでメタ言語表現の言及する先のオブジェクティブな言語行動の理由や事情である。本稿の冒頭（2. 1.）に列挙した各種のメタ表現のうち⑩「言語行動の目的・動機」に言及する類のものとして、それ自体、一人前のメタ言語表現である。

しかしながら、そこで選んだ言語行動の理由や事情を明示的に説明することと、そうした理由や事情によって選択・出現させられた言語行動の種類を明示的に説明することとは、文章の内容構成や行論上の配慮を、そのような言語手段によってはっきり（わかりやすく、明快に）述べておこうとする書き手の意図や動機に支えられたものであるという点で基本的なつながりをもつと考えるべきだろう。論述を進める上で書き手が選んだ、読み手とのコミュニケーションを円滑にするための方策として共通性を持つと言ってもよい。理由や事情のこうした明示的な表現が、メタ言語表現の動機や機能を考える上で有力な手がかりの一つになることは動かないであろう。

【参考文献】

- Austin, J. L. 1962 *How to Do Things with Words* (London, Oxford) 邦訳『言語と行為』（坂本訳，大修館書店，1978）
- Hymes, D. 1972 “Models of the Interaction of Language and Social Life” (*Directions in Sociolinguistics*, J. Gumperz & D. Hymes eds., New York, Holt, Rinehart & Winston)
- 野村雅昭1989「落語のまえおき その1～5」（『日本語学』8-2～9，明治書院）
- 西山祐司1983「発話行為」（安井稔他編，英語学体系5『意味論』，大修館書

店)

Searle, J. R. 1969 *Speech Acts : An essay in the philosophy of language*
(London, Cambridge Univ. Press) 邦訳『言語行為』(坂本・土
屋訳, 勁草書房, 1986)

杉戸清樹1983a「待遇表現としての言語行動——〈注釈〉という視点」(『日
本語学』2-7, 明治書院)

1983b「言語行動の規範とその運用の実態」(文部省科学研究費特定
研究〈言語の標準化〉総括班成果報告書1984)

1985「文書の定型表現」(『言語生活』408号, 筑摩書房)

1989「言語行動についてのきまりことば」(『日本語学』8-2, 明
治書院)

山梨正明1986『発話行為』(太田朗他編, 新英文法選書12, 大修館書店)

Wierzbicka, A. 1987 *English Speech Act Verbs : A semantic dictionary*
(Sydney, Academic Press)